国史文

SHIRO

国枝史郎

暁の鐘は西北より

伝奇文庫

KUNIEDA

第十三巻

国枝史郎伝奇文庫（十三）
暁の鐘は西北より
昭和五十一年十月二十八日第一刷発行

著　者　国枝史郎
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号一一二
電話　東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
振替　東京八―三九三〇
印刷所　図書印刷株式会社
製本所　株式会社千曲堂
定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
© Sue Kunieda 1976
Printed in Japan（文二）

国枝史郎伝奇文庫（十三）

暁の鐘は西北より

横溝正史・半村良・尾崎秀樹

講談社

暁の鐘は西北より

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

塙保己一と風流志道軒とが、宵の間、道を歩いていた。

二人は面識のある仲であった。

広徳寺前の盛り場の、葭簀張りの中で江戸名物の、太平記読みをしていたが、夕方になって人が散ったので、志道軒は一人で帰途についた。と、途中で保己一と逢った。そこで連れ立って歩いているのである。

上野の裾まで来た時であるが、行く手から十数人の人数が来た。

すれ違う時に話し声が聞こえた。

「……では五月の十日の深夜に。……ね！」

と云ったのは女であった。

「はい、よろしゅうございます」

こう云ったのは男であった。

女はたった一人だけで、後は全部男であった。

「今度こそ嘉右衛門を討ち洩らしてはいけない」

これも女の声であった。
「そうですとも討ち洩らしてはいけません」
——その一行は行き過ぎた。
「志道軒殿」
と保己一が云った。
「今、すれ違ったあの人達ですが、どんな様子をしておりましたか？」
「行者姿をしておりました」
「言葉つきに不審はありませんかな」
「言葉つき？　さあ、言葉つきとは？」
「日本の国から久しく離れ、異国の人達と交わっていた人が、物を云ったらあんなような言葉に。……」
「さあどうですか、私にはどうも」
「私は盲人でございますので、色や形は解りませぬが、音には敏感でございますよ」
「それはさようでございましょうとも」
「それに私には思いあたる事が……嘉右衛門！　嘉右衛門！　嘉右衛門と云いましたな？」
「さよう、嘉右衛門と云いました。今度こそ嘉右衛門を討ち洩らしてはいけないと」
「……」
保己一は黙って考え込んだ。
と、不意に顔を上げ、独言(ひとりごと)のように呟(つぶや)いた。

「……それでは嘉右衛門殿の一族が、また江戸へ帰って来られたのか。……去年のちょうど今頃だった、あの仁のお屋敷へ異国から来た、討手の者が乱入して、あの仁の一族を討とうとしたことがあった。……あの仁の持っていた珍書奇籍を、私は是非とも手に入れようとして、どんなに力をつくしたことか。……でもあの夜以来あの仁一族の、行方が知れなくなったので、どうすることも出来なかったが。……それでは嘉右衛門殿の一族が、また江戸へ帰って来られたのか。……ではどうともして珍書奇籍だけは、自分の手へ一まとめに集めたいものだ。……が、しかし討手の連中が、同じように江戸へはいって来たとあっては。……」

急に保己一は志道軒へ云った。

「五月十日に血なまぐさい事件が、江戸のどこかで起こりますぞ」

「面白うござるな」

と志道軒は云った。

「何かそうしたギョッとするような事件を、我々も人も望んでおりますので。……時世が時世でありますからな」

(物騒な話をしているわい。いずれも高名な人達だのに)

十二神貝十郎は微笑しながら思った。

(が、それにしても変わった話だ。異国から討手が日本へ来たなどと)

(さっきの行者の一行の後を、そうと知ったらつけて行ったものを)

浅草の知人を訪問し、その帰途に二人を見かけたのであった。

二人ながら高名の人物なので、どんな話をするだろうかと、ひそかに後をつけて来た結果、断

片的にではあったけれど、二人の話を聞くことが出来た。
（いかさま時世が時世だから、血なまぐさい事件が起こるもいいが、しかし俺の職掌としては、そういう事件を起こしたくない）
彼はそう思って思案した。

「お前達も知っている舞京二郎、数日前にやって来たが、変な人間になってしまったよ」
平賀源内はこう云いながら、蜀山人と宿屋飯盛とを見た。
「変な人間と云いますと？」
蜀山人が怪訝そうに訊いた。
「色情狂になったのさ」
「いやア――それは結構な話で」
宿屋飯盛が愉快そうに云った。
「某などは大賛成で」
「が、どうしてそんなものに」
蜀山人は真面目に訊いた。
「環境の罪とでも云うのだろうよ。なにせ京二郎の話によると、我々の想像出来ないような、変な人間や変な境地が、この日本にはあるらしいな」
「詳しくお話し願いたいもので」
「いずれ詳しく話してやるが、そういう所へ行っていたために、京二郎めそんなものになったの

だそうだ。それはそれとしてその境地に、一つ素晴らしいものがあるのだ」
「ホ――、なんでございますかな」
「非常に有益な一冊の本だ」
「本？　へ――、そんなもので」
宿屋飯盛が口を出した。
それを源内は睨むようにしたが、
「その境地へある連中が――異国から逃げて来た連中なのだそうだが、沢山の珍書奇籍を持って、入り込んで行ったということだ。その中に今云った本があるのさ。もっとも入り込んだ連中は今では江戸へ来ているそうだが」
「たとえばどのような本なので？　優れた異国の笑本なので？」
「ということであったとすると、飯盛、貴公など手に入れたかろう」
「それはもうもう千金を出しても」
「が、その本はそんなものではなく、それにその本を手に入れようとして、夢中になっている人間があるので、その人へ知らせてやるつもりだ。……十二神氏、何をしておられる？」
こう云うと源内は眼を返し、床の間の前に端坐して、その辺に沢山置かれてある、天気験器だの寒暖験器だの、震雷験器だの、エレキテルだのの、珍奇の器類を眺めている、十二神貝十郎を見やりながら云った。
「珍らしい器を拝見しております。……時々お宅へ参上して、こういう器類を拝見したり、変わったお話を承わったりすると、新しい知識を得られますので」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「器という言葉で思い出したが、拷問に異常な興味を持ち、拷問の器ばかりを集めている、狂人(きちがい)じみた人間、が江戸へ入り込んだということだ」

こう源内は思い出したように云った。

「こう世間が変態になると、変態な趣味者も現われますようで」

貝十郎は物憂そうに云った。

「十二神氏、よう来られた、お話しして喜んでいただきたいことが、昨日舞い込んで参りましてな。と云うのは貴殿にもお話しした、ターヘルアナトミという蘭語の医書の、在り場所がようやく分りましたので。……至急私先方へ参り、持ち主の手から譲り受けようと、存じておるところでございますよ。遠方の地におりますのでな。山の中の変な境地に」

知己の杉田玄白の家へ、貝十郎が訪問したのは、源内の家を訪問した日から、数日経った後のことであったが、貝十郎の顔を見ると、そう玄白は嬉しそうに云った。

「おそらく平賀源内殿から、お知らせがあったのでございましょうな」

貝十郎は笑いながら云った。

「これは意外どうしてご承知で」

「数日前に平賀殿の家(うち)へ参り、大体のお話を承わりましたので」

「ああなるほど、さようでござったか。……それにしても金が欲しいもので。旅費とそうして本をあがなう金を。……泉東十郎めが正気なら、それくらいの金は親ごの手から、調達をしてくれるだろうが、狂人(きちがい)じみたあんな人間になっては。……」

問わず語りのように玄白は云った。
「泉氏とやらは貴殿にとって、遠縁のご親戚と承わりましたが、では発狂などいたしましたので」
「旅へ出て旅から帰って来て以来、変なものになってしまいました」
「時勢が悪いと人間までが、気を狂わしてしまいますなあ」

これ以前から江戸の町に、変な気味の悪い殺人事件が、起こっていたことに留意しなければならない。

二

ダッ！　と一太刀！
プ――ッ血吹雪！
それでかたがつくのだそうだ。
「……解らないことを訊ねたあげくに『汝は美男で逞しい体だ！　あそこへおおかた召されるであろう！　それが汝の不幸せだ！　……召させまいために殺すのだ！』こうその武士は申しました……」
斬られた男はこういうように云って、息を引き取ってしまうのだそうだ。
幾人かこうして殺されたのであった。

その夜は遅い月があった。

ワッという悲鳴が一所で起こった。
十二神(オチフルヒ)貝十郎は走って行った。
一人の若い武士が斬り仆(たお)されていた。
そうしてその武士も同じことを云った。
と見れば数間の先の方を、一人の武士が歩いていた。
(彼奴(きやつ)だな)
と貝十郎は直覚した。
で、武士の後を追った。
早くもそれに感付いたものと見える、その武士は一散に走り出した。が、走り方が変であった。酒にでも酔っているようである。
浅草の奥山も今は寂しく、人の往来も全くなかった。
その奥山まで追って行った時、武士の姿を見失った。
見れば一軒だけ飛び離れて、菰張(こもば)りの芝居小屋が立っていた。
(ここへ逃げ込んだに相違ない)
で貝十郎ははいろうとした。
と、一人の老人が、小屋の中から現われた。
「武士が逃げ込みはしなかったかな?」
貝十郎は老人へ訊いた。
「失礼ながらあなた様は?」

「与力の十二神というものだ」
「おお高名の十二神様で」
「武士が逃げ込みはしなかったかな？」
「半年ほど前でございましたよ、一人の不幸なお武家様に、山の中で逢いました」
「いやたった今この小屋の中へ、逃げ込んだ武士のことを訊いているのだ」
「そのお武家様へ山の中で、私はこのように予言いたしました。『いつまたこの次あなた様とどこでお逢い出来ますやら。……私は今から申し上げて置きます。あなた様は変わっておりましょうと。……私のことをお忘れなく、時々お思い出しくださいまし。……いずれはお逢い出来ましょうよ。……狂人になられたあなた様と。首をくくられたあなた様と。さあ、そのどっちかのあなた様と』……このように予言いたしました」
「……」
「そのお武家様と逢いましたので。へい、それも、今夜、ただ今」
「ああその武士があの武士なのだな。ちょっとその武士に逢わせてくれ」
「狂人（きちがい）を何んとなさいます？」
「狂人？　ふうん、狂人なのか？」
「狂人にもいろいろございますが」
「貴様は誰だ！　変なことを云うが？」
「船子（ふなこ）佐平と申しますもので」
「おお、お前が船子佐平だったか」

「十二神様お引き取りくだされ」
「お前を信じて引き取ることにしよう。……世の廃人(すたれもの)を拾い集めて、小屋掛け芝居を打ったりして、真人間にする奇特の人間だと、前から噂を聞いている。その武士を真人間にしてやってくれ」
貝十郎は立ち去ってしまった。
と、すぐに小屋の中から、船子佐平の叫ぶ声が聞こえた。
「あッ、いけない、逃げてしまった！　あのお武家様、逃げてしまった！」

それから二、三日の日が経った。――
「……この屋敷へおはいりくださいますな。はい、この屋敷のあの部屋へ」
貝十郎へ声をかけた者があった。憔悴した若い武士であった。陰間(かげま)めいたところがある。
「いや、拙者は、何もこの屋敷へ。……」
貝十郎は驚きながら、こう云って相手の武士を見た。
「私がこの屋敷へはいりますので。はい、この屋敷のあの部屋へ。……ああどんなにこの私はこの屋敷のあの部屋へはいろうとして、苦心していることでありましょう。……あなた様にはおはいりくださいますな」
「拙者は決してはいりはしませぬ」
云い云い貝十郎は眼を配って、前にある屋敷を眺めて見た。
それは宏大な屋敷であって、土塀が厳(いか)めしく囲(めぐ)らされてあった。しかしどうやら遠くない過去に、火事にでも遭ったものらしく、そういう痕跡が残っていた。立ち木などが焼けているのである。

（それにしてもこの武士は何者なのであろう？　常規を逸したところがあるが）

朋友の桂川甫周を訪ね、その帰路根岸の金杉まで来た。と、突然若い武士に、貝十郎は声をかけられたのであった。

（狂人などではあるまいか）

改めて若い武士をつくづくと見た。蒼白い顔色、ドロンとした眼、放心しているような開いた口、乱れた鬢、崩れた衣裳、――狂人じみたところがあった。美貌であるために凄くさえあり、それが月光に照らされているので、凄さの中に艶なところがあった。

その武士は貝十郎がそう云ったので、安心をしたというように、佇んでいる貝十郎を見捨てて、屋敷の門の前まで行き、内の物音を聞き澄ましたが、また貝十郎の傍へまで来ると、ひそめた声で囁いた。

「あの部屋にはあるのだそうでございますよ、真紅の物が、真っ白い物が、磨かれた物が、軟かい物が、ああそうして堅い物が！　……それは人生の縮図であり、それは人生の精粋であり、それは人生の鋭角的の、頂点だそうでございます。……乳房だ、腰だ、腕だ、股だ、デップリ肥った素ッ裸体だ、そうしてヌラヌラした髪の毛だ、そうしてグニャグニャした足の裏だ、桜色の踵だ、腋の下の毛だ、ああそうして棘々の兜だ、締め木、鎧、螺旋、管、首枷、鉄杖、滑車、鉛だ！　二通りの物だそうでございます。……そうしてその部屋へはいって行って、そうした二品にぶつかった者は、その一度の経験で、その後の人生を見捨ててしまっても、悔いないほどにも強い刺戟を、受けるのだそうでございます。……私は退屈をしている人間なので、是非ともその部屋へはいって行って、その二品にぶつかって、その私の退屈を、追い払ってしまいたいのでございます。……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com